

性的羞恥心は反革命なり

1

いま辻潤の全一卷エッセイ集を編んでいるのであるが、数年振りに全巻読み返してみても、至るところ山岸巳代蔵との類似性、近似性を発見せざるを得なかった。

私としては山岸を追求する上において、この執筆を始めてなお、大まかにいって一方は唯一自我の個の人、他は自我一体の全の人として、人間の両極を生きぬいた典型的人物として捉えてきたつもりであるが、それがさに非ず、時間の経つにつれて、むしろ山岸の真意は唯一自我の個にあり、反対に辻の真意は自我一体の全にあることが、おぼろげながらわかってきたような次第である。

両者は人間の思索の両極に立って、各々他方の反対極を指さしながら、結果的には重なり合っているのである。

実際、辻と山岸は酷似しているのであって、辻を頭わす特徴メルクマールとしての、甚だしい常識的世界の軽蔑感、それに対するに四次元的世界と天才の重視、平等よりもむしろ個の特色を飲む反面、微菌やなめくじまでも同志とみて、その生を認めるなどといった点は同じであり、かつ、文章の自嘲、諧謔、逆説をまじえた凹型調の発想においても似かよっている。仔細にみれば、これまで山岸に関して述べられてきたことの大半は、辻潤のエッセイのどこかに述べられているといって過言ではないであろう。

とすると、西田天香と石川三四郎の影響に加うるに辻潤かということになるが、私は肯定せざるを得ない。人間像と社会性の両面において天香・三四郎の大きな影響を受けた山岸は、さらに気質や感性や視点の面で辻潤に大いなる刺激を受けざるを得なかったのではないか。むしろ、初めに辻潤ありきで、総合カオスとしての辻潤が分化して（特殊化して）、さらに天香・三四郎になったと考えた方が、思索の順序として理解がし易いのである。

思索の順序として理解し易いというより、もっと大元の種明しの言い方をすれば、鶴見俊輔氏は、山岸の思想は、老子、莊子、ガンジー、ゴドウィン、ギュイヨール、クロボトキン、リード、ブーバーに似ているといわれるが、まさにその通りで、およそ仏教を含む虚無思想とアナキズムの二点を中心とする楕円形の範囲内では（あるいは自然思想を中心とする円の範囲内では）、一つとして同じものがない代りに誰の思想も似かよってくることになるのである。楕円形内の典型的日本人が、辻潤であり、かつ天香、三四郎だったに過ぎない。

そういうことで、山岸は同じ血の匂いを嗅いで、辻潤、天香、三四郎をみつめていったごとく、私もまた似た汗香を持つ人として山岸に迫っているわけであるが、この山岸、半面非常な恋愛家であった。単に恋愛家であるより、己れの原理の忠実な実践者として、常識の眼からすれば恐ろしいまでの性体験を得た人である。しかもその山岸の恋愛感の背景において、私は辻なる人の手を見ざるを得ない。

なぜなら辻は恋愛においては情熱的というよりは信仰的ともいえる態の、恋愛感を抱いていた人である。周知のように辻潤は大震災の折、大杉栄と共に扼殺された伊藤野枝の先夫であって、彼は野枝と別れて後、一転してボヘミアン生活を送ったが、やがて比叡山において一女学生との恋に陥る。そ

の時の悲痛なる苦しみをつづった文章が、「浮浪漫語」というエッセイであるが、彼はこの中でいつている。「近頃僕は自分の求めてゐる幸福と云ふ物の正体が稍々ほんたうにわかつてきた様な気がしてゐる」。それは何かといえ、一人の女性の全部の愛である。女性の、三分や四分の、あるいは八分九分の愛ではない、まるまる十分の愛を享けて、「自分もその一人の女性を自分の全部をあげて愛する」。もしそんな愛が完成したなら、自分はその他のどんな欲望が充たされなくとも構わないだろう。「僕はさう云ふ女性を見出す迄は頭髮が悉く白くなり、顔面が皺苦茶になり、身体が瘦せさらばへるまで、この地上を七転八倒しながら、呻吟^{うめ}き苦しみながら、のた打ちまはつて浮浪しやうと思ふ」。と。同じように山岸は人に問われて、答えているのである。

「私は女好きだという定評を立てられているようですが、その通りだと思ふ。……女の人みな好きです。そうしてもっとも相合^あう人を意識して、或は無意識の中に求め求めて今日まで一貫していたと思う。恋愛巡礼、結婚巡礼というか、本当の結婚を求めに求めて、仕事そのものもそうだったといえるように思う。すべてに本当の結婚を求めている私だったといえよう」(「恋愛と結婚について」安井登一)つまり山岸また辻潤同様に生涯を懸けての恋愛の騎士であり、そんな恋が現実に現われれば生命をもいとわぬ態の戦士であった。ただ両者の異なるところは、辻が、たった一分も欠けてはならない恋の結実において人生の終点とみるのに対し、山岸は、そこを始発としている点であろうか。

この山岸の執拗無残ともみえる愛は、現実には福里二ワとの間で行われるわけであるが、山岸がそれほどまでに恋愛に終始した背景は、これまでの説明で充分窺われるはずである。山岸ズムとは即ち愛の哲学である。

「宇宙自然界の現象を見ると、宇宙、天体、太陽、地球、月等を含む星と星との保ち合いによって安

定している。……相互間に、力の測定も契約も、宇宙創生以来なされていないだろうし、各自律的に他との関連作用によつて無識の中にそれぞれの場を得ているようだ。即ち、契約も掟・命令も指導も守らねばならないとする軌範もないのにもかかわらず、少しも逸脱がない。約束もないのに正しく保ち合えるもの、保ち合える真理こそ愛の無測定・無限・無形の作用だと思ふ。この正しい保ち合いの理が愛の理、または真理ともよばれる」(同上「正解ヤマガシズム文庫第三輯」)

といい、「愛とは真なるもの。真即ち愛である」とつづけている。

三四郎が真実即美と答えたのに対し、山岸は真実即愛という。この普遍的かつ根本的条件において、彼は恋愛の絶対正当性をも認めたわけであるが、むろん彼自身に属する孤独な心情によつていたことは想像できる。

大体彼の知的方法主義はその本来の心的機構からして、人を無限に孤独に追い込んでゆくことでのみ成り立つ。方法意識とは即ち対象と自己との間の紐帯を切断するということであり、方法意識の深さは即ち孤独の深さと重なり合う。この孤独において、人はいやが応でも連帯もしくは愛を自覚せざるを得ない。しかも愛の自覚において、逆に愛がより一層育成されてゆくとといった相互関係を保っていたのが、山岸であったと推察される。

かくて山岸は理論面からも人間面からも、愛の人たらざるを得なかったわけであるが、山岸の人生において愛即恋愛であるかのごとく象徴されるためには、かなりの待機の時間を要した。山岸会の発足、もっと具体的に「特講」の開始まで待たねばならなかったのである。

むろんそれ以前に女性関係がなかったわけではない。大いにあった。山岸は自分の口から、「一時は五人の女がいた」と語っていたこともあるそうである。養鶏組合時代、蝶ネクタイをしめてめかし

込んでいたといわれるのも、対女性関係あつてのことかもしれないのである。

しかし何といつても、山岸会発足と同時に女性と接する機会が多くなつてきた。まして「特講」においては毎月二回、入れ代わりたち代わり、各地から受講生が特講会場に押し寄せてくる。その中でただでさえ多くの女性から慕われていた山岸であつてみれば、性的関係まで至る女性が現れないわけがなかった。中でも山岸の愛人と目されたのは、T・O、Y・I、福里ニワの三人である。このうち最後のニワとは事実上夫婦関係となるのであるが、T江は三十一年一月の最初の特講、Y子は同年四月、ニワは翌三十二年の八月の特講と、何れも特講を通じて知り合つてゐるのである。

このうち、T江は子供が三人ある徳島の女性で、瓜実顔の美人であるばかりでなく、山岸がどんな大きな話をして、「ほう、そんなすばらしいことができるのですか」といつて決して「そんなことしたら、大変なことになるでしょう」とはいわない、大きな素質を持った女性であつたそうである。そうした魅力的な女性に巡り会つて、山岸はひどく飲んだ。

一回目の特講が終わると、早速ラヴレターの交換が始まつたらしい。山岸の著作の大半が口述筆記で、ラヴレターもまた側近の女性のMに代筆させ、一方T江からは内容も文字も手本にしたいくらい返書が送られてきた。そのうちに山岸の想ひはますますつゝつて、同志数人を引き連れ、四国拡大と称して、密かに自分はT江に会いに行つたり、反対にT江の方が、まだその頃は向島に山岸の家があつた頃であるから、泊り込みの研鑽会にやつてきたりした。

一度など台風だというのに、Mは山岸に頼まれて、はるばる徳島までT江を連れ出しに行つた。その頃には、T江は家人に感づかれて拘束状態にあつたのである。それで会つとすぐにT江は、「行きたかつたんやけど、仲々出られなんだ。今度はすつきり荷物持つて出るわ。女中やお母さんきたら止

められるから、お母さん夕飯食べる時出るわ」といつて、同行者にリヤカーで荷物を運ばせ、家を出てきたのであるが、翌日、事情を知つた父が迎えにやつてきて連れられて歸つた。結局、この恋は結ばれず、山岸は「T江、子供連れてきたらええのに、T江が来れば、大仕事ができるのになあ」と、しきりに口惜しがつていたことである。

このT江が離れてゆく原因ともなつたのは、その後ニワとの間で紛糾を重ねた新しい愛人のY子の登場にあるらしいが、Y子はT江と違ってまだ高校を出て間もない十八、九の百姓の娘っ子である。写真で見ると、背のあまり高くない、それほど美人でもなく、どこかあどけなさが残つてゐる丸顔の女性であるが、この女性とは親も特講を受けて承知の上で、一時四日市の実家の一室で同棲していたこともあるほどの間柄にあつた。

山岸のこの孫みたいな娘への愛情は、孫故の可愛さにも似た愛情であつたようである。山岸はY子のことを、「空気がみたいなもんや」といつていたそうであるが、そうした表現の中にY子への愛情の在り方を物語つていたといえる。人の話に依ると、Y子は「はい、はい」といえる、娘のお手本みたいな女性であつた。例えば浪曲をやれといわれれば、すぐさま「はい」と答えて、下手くそではあるが、まじめくさつて浪曲をうなりだす。人前にあつて出しゃばることはなく、坐つていてもそこだけが何となく明るい雰囲気があつた。

そういう娘であつたから、山岸の平生の張りつめた気持が常に慰められたのである。心の内側のひだをぬるま湯で洗われるような、やすらぎを感じたのである。それで山岸は周囲の者にも、「Y子は料理は下手だが、Y子がつくつたものは何を食べてもおいしい。Y子がいると心が安まる」と語つてゐた。空気は空気故に、負担にならないし、かつ生きる上で欠かすことができない。つまりそういう

女として山岸は、Y子を愛していたのである。

一方、こういう夫の行状に対して内心面白くないのが、妻の志づ子である。

志づ子という人は先にも紹介した通り、話は上手、字も上手、針を持たせても、百姓させても何でも並以上にやれる人である。当時しげしげと接触していたMに依ると、

「稲刈らしめても、縛っても手際の早いこと、人の倍やった。かがまないで、立ったままでやるのやから。ご飯たくのにも枯草たいてたくし、漬物切ってもしつぽを捨てようとしんない。布切れを断つて捨てようとする、それは下駄の鼻緒に使えますよというし、米のとき汁まで、それはトリにやれますからとくる。山岸先生の感化やろうが、何から何まで始末して活かすことのできる人やった」

という賢婦であった。そうした女性であればこそ、山岸は「私がこうしていられるのも志づ子のお蔭や」といい、研鑽会帰りの寒夜、妻に優しくマフラーをかけてやって「どこまでも一緒にゆこうな」と促してもいたのである。

しかしそうした機敏に働ける女性であればこそ、彼女の勝気で、鋭い性格もまた窺えようというものである。その勝気で鋭いものが、時に夫の巳代蔵と周囲の者を突き刺すことはあったろうことは想像できる。一時山岸の農作を手伝っていた弟千代吉の次男の話に依ると、志づ子は泥足のままに室より一段低い縁先に腰かけて昼食を摂っている巳代蔵に、皿にもものせないで、板の間にじかに漬物を出すような感覚の持ち主でもあった。まして女性問題がからむにおいておや。Mが青瓢箪みたいな顔をしている山岸に魚などを提げてゆくと、志づ子から「私も先生のこと考えてますよ」とたしなめられた。他の人に聞いても大体感想は同じで、勝気という点では共通しており、山岸が周りの特定の女性をちょっとでも賞めようものなら、パツと顔色が変わったそうである。

そういう女性であるから、山岸がY子を秘書役として使い、三十一年六、七月頃に、久方振りに同道して家へ戻った時には、志づ子は忽ち嫉妬して、Y子を家内に入れようとしなかった。それで止むなく、九月には山岸はY子を連れて、Y子の実家のある四日市住まいを始めるのであるが、翌春に父母の関係の回復を願って娘の映が接触の機会をつくった。

京都の某所で研鑽会が持たれたのであるが、そこへ志づ子と映も顔を見せていて、映は同席のMに頼んで山岸を向島の家へ連れてくるように依頼したのである。二階には映の三畳間があって、ここで久方振りに夫婦は相對したのであるが、翌朝Mが「先生、どうやったあ」と質ねると、当人はアツケラカンとして、「さっぱり、どうもならん、役立たん。どうにもあれの要求に応じられなんだ」と答えたそうである。Mはその話を聞いて、「先生でも、人によってできんことがあるのかいなと、大笑いしました」と、さもおかしそうに語っていた。結局、この時点を以て二人は離別ということになるのであり、次に志づ子が巳代蔵に對面したのは山岸の側からの、正式の離別としての除籍の申し入れの場においてであった。

一方は火性、他方は水性、ちょうど、野枝と辻との関係にも似て、とどのつまり女の火性と男の水性は相分つことになった。それも芯からの水性ならばともかく、内面的には男の激しい火性を胎していたから、その内面の火性と相手の体ごとの火性とがぶつかる、どうにも和解がつかなかったのである。

山岸は、若い頃は一旦怒りだすと、止めどもなく怒りつづけたものだそうである。彼の優しさは、いわば天性のものであると同時に、哲理によって育て上げられたものである。

ただし志づ子の側からすれば、ゴマンと言いい分があったろう。事実、山岸会事件のさなか、喚問を

受けた志づ子は取調官の前で、取調官もあきれるほど前夫の悪態をついているのである。もともとの彼女の性格もあるが、山岸ズムを離れて普通人の生活に戻ってみれば、已代蔵のなすこと、いうことすべてが目茶苦茶の気狂い沙汰のように見えたのは当然である。

いってみれば山岸は、手当り次第に女に手をつけた。相手の女性に亭主があらうと、なかりうと構わないのである。気に入らえれば誰とでも寝るといふのではなく、気に入らなくとも寝る。つまり相手が女でさえありさえすれば、誰とでもつきあう。戦後間もなくの時期には妻の妹とも関係があり、死産ではあるが子供まで設けている。その妹はもとと病身であったが早くして世を去り、そのことで志づ子は、自身も縁者との関係を持ちながらひどく傷ついていたようである。

しかし傍からみれば今世之介のようになって愛の彷徨をつづけていた山岸であるが、当人は当人なりに理屈があった。いや、理屈があったというよりむしろ頭腦的には、己れの原理の忠実な使徒としての行為にほかならなかった。宇宙世界の絶対間違いない真実を以て、自己の生活を律する。それが自己の使命だとすれば、男女問題にも直線的に当てはめる必要があった。その真実とは「無固定、無定数」「無所有」である。

つまり、この世の真実態は万物流転、諸行無常、固定というものがなく、本当であり、従って定数というものもないのが本当であるとすれば、男女関係においてもこの原理を当てはめて考える必要がある。即ち、今われわれが正当として疑うべくもなく暮らしている一夫一婦婚は、決して唯一絶対のものではなく、本当にそれが相合うものであれば一夫二婦婚、一夫三婦婚の複数婚があっても不思議はないことになる。それはまさに自由であって、一夫一婦婚のみよしとする近代的結婚観は、いとも簡単に否定されてしまうのである。

次に無所有であるが、同じように無所有こそ現実（真実）とすれば、財産を持つなどということが不可能であると同様に、家庭を持つということがあり得べきことではないことになる。まして家庭の内容である妻、夫、子供を持つなどという言葉も、真実からすれば甚だしい形容矛盾ということになる。それらを持つとするのは、根源的には仮初の錯覚に過ぎず、夢幻の如きものに過ぎない。

ここからすぐさま引き出される結論は、性の完全自由ということである。無固定・無定数であればこそ、妻の他に愛人がいても当然ということになるし、無所有であれば人妻や妻の妹は、何の禁忌も意味しないことになる。つまり山岸は今ふうにいえば、性のユートピアを目指していたのである。

しかしここで問題になるのは、例え理想はそうであろうとも性の長い間の禁忌の習慣が、容易に性の解放を認めようとはしないことである。世間がうるさい。いや、世間以前に自己自身の内心の禁忌の声を聞かざるを得ない。それは主として二つの感情として現われるのであって、一つは羞恥心、二つには嫉妬心の感情である。自分が異性と交わろうにも羞恥心があつてはどうにもできない、自分の他に女ができれば、やはりやきもちを焼いて、怒り狂う。これではどうしようもない。それだからこそ山岸は、嫉妬心と羞恥心の消滅の研鑽に努めた。

つまりかの「怒りの研鑽」は、この嫉妬心に伴う怒りの研鑽もまた含んでいたのである。男にとつては主として羞恥心が問題であるが、彼は大杉栄と共に、「猫は屋根の上で、犬は道ばたで、人目は勿論猫目も犬目も憚らずに、しかも大声を立てて恋をする。何故人間のみは、あんなに恋を恥しがるのだろう。……羞恥や貞操がそんなにありがたいものか——」（「羞恥と貞操」）とまじめに自身に問いかけたのである。

その思考の材料として原始民族と未開民族の性習慣があつたが、彼らの何れの民族も、裸体でいる

ことや生殖欲を満足させることに、羞恥と貞操の観念を持っていない。もし持っているとすれば、それはすでに文明に侵されたためであって、メラネシアやポリネシアに行くと殆ど動物同様に性は自由であり、オーストラリアの民族の中には、しばしば親と子が結合するものもある。大体羞恥の感情は体を覆う衣服と大いに関係があるので、民族学者は衣服をつけた民族の、つけない民族よりも羞恥心が濃いことを指摘している。

恥ずかしいといえど人前でめしを食うことすら恥ずかしいのであって、もし人前でめしを食うことが恥ずかしくなくなっているのなら、同様に人前で性行為を行うことも恥ずかしくなくなるはずのものである。結局、性の自由が侵され、同時に羞恥の感情が養成されてくるのは、父権社会が成立し、一夫一婦婚が常識として養成されてくると同時のものであって、それは甚だ社会的な意味合いを持っている。

性の解放は最も個人的なものであると同時に、最も社会的なものである。彼は自分の行なっていることが共産主義といわれると、「中共やソ連と同じものかどうか充分に検べてくれ」といつていたが、まさに性自由の観念において両者はまったく相違していた。そして羞恥心の払拭において夫子自身どうであつたかといえど、伝えられる限り、山岸はみごとに性に伴う装飾的感情からまぬがれ、生の人間性のままに存分に生きていたのである。

人前でファックすることなど平気である。側近と共に旅に出て宿舎に同宿することが多いが、そんな場合でも、寝ている人の隣でせつせつとY子と船をこいでいる。時によると、傍の者に作業を手伝わせて、補助だの清掃だのまでさせる始末である。

それを聞かせてくれた人は、「本当に先生は天真爛漫の人でした」と笑いこけていた。特講の際で

も、合間に気がむくと、別室で個人研鑽を行っている。そこへ人が入ってくると、さすがに女は男をはねのけて、前を被ったりするが、当人はそんな時、悠々たるもので、慌てず騒がず、「何でこんなええことしとるのに途中でやめるんや」といつて、優しく女をなじっていたものである。

京都の会員宅にある日、女性二人と同伴で山岸がやってきたので、山岸の床は座敷にしつらえ、二人の分は隣室に用意しておいたところ、小用があつて座敷をのぞいてみると、そこには山岸はいなくて他の女性が寝ており、山岸は、ふすまの空けてある隣室で堂々と励んでいる最中であつたという。

「長いこと時間かけてやつとる。人の鼻先で、度胸のあるやつちゃったなあ」と、当時を回想していた。山岸とすれば、性によって自己が愉しむばかりでなく、それをわざわざ開放して他人にみせることで一体研鑽している積りだったのである。

2

やはり旅先のことで、女性数人と同室していたのであるが、彼は寝ている傍の女性を、わけへだてなく平等に一人ずつ訪問して、愛の恵みを垂れた。その時横にいたのがY子で、翌日、何かしら山岸に対してぶんぶんしている。どうも自分だけ抜かして女と見なされなかったことに、不満を抱いているらしい。そういうことで次回には、まだ生娘のY子にも女の遊びを教えてやったという。

性もこの辺に至ると、すでに何がしかの退廃の匂いが感じられないこともないが、むしろそれは童児の玩具遊びに近いものであつたろうことは想像できる。それは当人は純粹にスキンシップを愉しんでいるのみで、射出を行っていないことでもわかるし、氣に入らなくてもできるといったのは、Y子

と同室にいる場合、相手によって男性自身が奮い立たないと、Y子によって一度エレクトさせておいて、その足で次会場に移るといったことまでやっていることで推察できる。

つまり自己の性的な脱羞恥心を、そこまでに鍛えたということにほかならない。

こういう話を聞くと何となく毛沢東のいう「感性までの変革」、あるいはデカルトの目指した理性による「情念の支配」を想い起こしたりするのであるが、それはともかく、山岸が性の百パーセント解放を目指したについては、もう一つ重大な意義があった。それが、「山岸会」(方向の四)にいう「学問と実験を基として体質を改造し、疾病を排除し、外観実質共に優秀なる子孫が生れ」の究極的内容をなす人間の「体質改造」ひいては「人種改造」の問題であった。

この「人種改造」が山岸ズムにおいては、どれほど重要視されているかは「特講資料」を見てもわかる。現在はこの部分は意図的に単に音読することのみで終わっているが、「知的革命私案」十八項目の中四項目を費されていることでもその重要度がわかる。山岸ズムにおける知的革命はいつ、いかなる人、いかなる場所も問わず行えるものとされているが、事実上社会的な知的革命案は、実顕地の拡大と、この人種革命案にあるといつて過言でないのである。

山岸はいっている。

「人間と云う生物は案外迂闊なもので、他の動植物に対しては、随分思い切った改良を加え、新しい優秀な品種を作出し、その特徴を高揚して来たにかかわらず、肝腎の人間自身の問題には頗る狭い考え方で、排他的や、純血至上思想や、人間冒瀆感等、因習・道徳・宗教観に捉われ、罪惡の様に惧れ、たまたまそれを採り上げて研究し、発表された著述等も、歴史的民俗変遷史や、学説・理論に止まり、人為的積極的に、実際に応用一般化されたものは、未だ微温的な優生法に止まり……ここに於

て、私は遺伝繁殖学的、及び人為的、自然環境変異理論を基礎とした、計画的積極的人種改良を、急速に且つ現状に即して、理論と實際を結び付けた方法にて、実施せんとするものです」(『実態』)

つづけてキリストや釈迦は先天的に優れた遺伝子を持っていたはずであるし、また彼らでなくとも世界の各所に、秀でた因子があつて伝承されているに違いないので、それらの優秀な遺伝子を持つ人間により機会を与え、百万人のエジソン、一千万人の釈迦、キリスト、カント、マルクスに優る人を育てたならば、世界はどんなに変革されることでしょうか。そして白痴、低能、狂暴性、悪疾病、醜女の遺伝子と置換されたならば、人類はどんなに幸せになるでしょう、と熱っぽく語っているのである。

確かに人種改良は可能である。十九世紀後半、生物進化の理が認められて以来、動植物の実験においてはすでに驚くべき結果を得ている。ずっと以前に植物では刺のないサボテンができているし、動物では黒牛からホルスタイン種の乳牛を取り出すこともしている。ただし、動植物に比して人種の改良は遅いといえども、それでも二、三百年の経過の中には偉大な成果が生れることはハッキリしている。十万人に一人とか、百万人に一人とかいう異常天才についても、その系統をよく調べることで、出現を予期できるはずである。

しかしここで問題になるのは、やっぱり人種改良を阻害するものとしての心理的要因である。いわゆるのなない処女崇拜や、「貞婦二夫にまみえず」といった純血至上思想や人間冒瀆感情から解放されない限り、実行は到底不可能である。ここにおいて、山岸はそれら心理的阻害要因からの脱出のお手本をみせんと、先駆的に自己研鑽をしていたのである。

後に二ワが山岸に対して「あんたみたいな色好みが……」といういい方をしたら、途端に山岸はキツとした真顔になって「あんた冗談でいっている積りならいいけど、本気でいっている積りなら問題

ですよ」となじったそうであるが、外見の色好みの背景には自身の打ちたてた思索があった。

この人種改良であるが、山岸がこれだけ自信をもって語るについては、むしろ、養鶏家としての自信が人間にまで及んでいたことはいうまでもない。彼は鶏の優れた飼育家であるばかりでなく、優れた品種改良家でもあって、山岸三号種（昭和二九年度現場検定農林大臣賞受賞）という近交系三種間交配雑種の実用食卵鶏を産み出している。この鶏は、それまで実用鶏として好評であった一代交配種の名白、ロックホーン、ロードホーンよりもはるかにすばらしい高性能で、雛が大きく、発育も早く、強壮で、極端な粗食に耐える鶏である。

ただし人種改良の提言そのものは山岸の発明したものではもちろんない。一九〇一年頃、チャールズ・ダーウィンの従弟に当たるフランシス・ゴルトンが、「法律にも、感情にも逆わずに人間種族の改良のでき得べきこと」の題で一回の講演をなしたのが最初といわれ、それが日本にも入ってきて、『進化論講話』の生物学者丘浅次郎らによって普及され、それ以前にも『福翁百話』の福沢諭吉によって提言はなされていたのである。

因みに福沢は「爰に道徳を欲すれば天下の人をして悉皆釈迦孔子耶蘇たらしむ可し、物理学者の所望とあれば幾千万のニウトンを生じ、武人の必要と云へば到る所に加藤清正本多平八郎を見る可し、男女の体格を大にするも小にするも美にするも醜にするも其色を白くするも黒くするも……」自由自在であると、「漫語」として語っている。この福沢の漫語を、漫語としてとらなかつたのが山岸である。

福沢は、「其繁殖の速ならんことを欲すれば、一男にして数女に接するは無論、配偶の都合により一女にして数男を試るも可なり」と大胆な提唱をしつつも、他方では、「古来偕老同穴は人倫の至重

なるもの」として一夫一婦制を認めていたし、丘は「もし行なわれさえすれば、いちじるしく効果のあがるべきは確かであるが……」としながら、「内縁の夫婦が何の制裁もなく子孫を遺しうる社会以外では」効果はまことに少ないとまったく諦めていたのである。

それに対して山岸は資料にもあるように、将来必ず実現されるという信念を持ち、自らも本気で、その実施案を練っていた。その下拵えとしての顕れが「色好み」であった。

ただし山岸ズム結婚観にも微妙なズレがある。微妙なズレどころか本質的な転換かもしれない考え方が、その後に生れてくる。というのは、同じ宇宙の真実観に立ちつつも、宇宙の真実自体が両極（矛盾）としてあるので、その何れの極に立つかで結論されるところは決定的に変わってこざるを得ない。宇宙の真実は流動であり、かつ調和である。この両真実の一方に立てば結果として性の彷徨しか生れないものが、他方に立てば、安定が得られて当然ということになってくる。山岸の結婚観においても、その力点の相違がある。

そういう山岸のウエイトの置き方の相違は如何にして生れるかといえ、それは結局、状況においてではない。山岸にしてみれば、当初から山岸会の真目的は「自然と人為の調和」（会旨）を謳っているものである以上、結婚こそまさに調和安定でなければならないことは百も承知であったかもしれない。しかし旧式結婚観を毫も疑っていない今にあって、どうしてもその破壊の面をより以上に強調せざるを得なかったということは想像できる。

またそうでなくとも、自己の肉体が自己の意志とは独立的に徒らに蠢動していたのだともいえる。後に女から女へと転転と移り、老いさらばえた二ワの兄が何人目の女と同伴で、彼らの許へ訪れたことがあるが、その兄が帰った後で、山岸は「あれがあんたに会うまでの私の姿やった」と告白して

いたそうである。やはりこの時期（この後も更にしばらく続くが）の山岸は、自己の産み出した合理論以外の、どうにもならない自己の魂（悪霊？）によってつき動かされていたとみるより、仕様がな面もあったのである。

彼の複数結婚観（複数であってもいいという意味で、複数であるのが正しいとは違う）の現実的根拠についていえば、恐らく、アナキズムの最大ボス大杉栄の刺激もあったことであろう。周知のごとく大杉は妻の堀内保子、伊藤野枝、神近市子の四角関係の複数恋愛にあって、遂に神近に刺されるに至ったのであるが、大正期のこの事件は当時の知識階層を大きく動かしただけのものではない。アナ陣営の一端に加わっていたらしい青年山岸も、影響を受けなければならなかった。

ところで、山岸のいい方を借りれば、「もともと相合う人を意識して、或は無意識の中に求め求めて今日まで一貫して」きたのであるが、こうした愛の巡礼において山岸は、「もともと相合う人」を見つけることができた。

百パーセントを一パーセントも欠けることのない恋愛をみつめるまでは、身体が痩せさらばえるまで、七転八倒しながらでも生きてゆくといった辻潤は、文字通り人生をうめき苦しみ、のたうちまわり、遂に「真の恋愛を掴むは、宇宙の塵を掴むが如し」と悟って、一敗地にまみれたのであるが、山岸は、同じくうめき苦しみ、のたうちまわってでも、真に相合う人を見つめることができた。

それが第三（？）の愛人で、後に山岸会事件の折、「山の女首領」「山岸会の女王」としてマスコミで騒がれた福里ニワである。

福里ニワは宮崎の産にして、今もなお山岸の遺志を継いで、医者から生きているのが奇蹟といわれるような病身を押し、滋賀の忍者の里で「福里哲学実顕場」なる無我執研鑽の場を設けているが、

当時三十八歳、女盛りの美しい未亡人で、生計に宝石を扱って、四日市では評判の女性であった。

ニワは、少女時代には中国に新国家建設を夢みての女馬賊志願だったといい、そのために馬術も習って、走り来たる荒馬を下駄をはいたままタッタッタと近寄り、片手で手綱を掴んで止めたなどという伝説もある。このような大胆な少女であるから、体験を経ては一層厚みが増え、四日市時代には、床の間の背に於いて、芸者に酒をなみなみとつがせて、上気しては芸者の美声を求めて耳をすまし、自らものを鳴らすといった典型的な女傑になっていた。

そうした女性が山岸と知り合うに至ったのは、先にもいうように、昭和三十二年八月十六日からの特講会場（京都・三姑寺）においてであって、その出会いは彼女もこれまでの例に洩れないのである。ただしニワはこの特講会場へは、初めから予定してきたわけではない。当時知人の、自らも特講を受けたことのある三重県会副議長岡本善衛に、「涼しい避暑地があるから……」と、いわばだまされて連れてこられたものである。そのせいもあって、不承不承特講の場についてニワは、係の言にはことごとく反発していた。

第三十九回は、四百人余りの大きな特講だったそうであるが、ニワ一人の発言のために、しばしば会場が停頓するといった具合だった。そのニワの近辺に「大村公才」の名札をつけた、顔はガサガサ、髪はボサボサ、まさに貧相の代名詞みたいな中老の男が坐っていた。彼は会場の混乱の中で出てきた相手の係の一人であるが、ふと気がつく、自分の傍に居るのである。気がついてじっとみつめると、相手は少年のようにポツと顔を赤らめる。「木村公才」とは山岸本人で、これが最初の愛の信号であったろうか、ニワも信号を送られて、無意識の中にわがみだしなみを整えたりしていた。

結果としてニワはこの特講においては、「無所有」の段階に入って、突然、「自分は誰のものでもな

い」という天の啓示にも似た直感を得る。それで有頂天になって歓び、一転して、特講の推進に協力し始めるのであるが、帰宅して後も引きつづき山岸会には最大限の協力をするようになった。ニワにしてみれば、少女来の念願である「わが進むべき道」が初めて得られた思いであったのである。

四日市では会員に盛大に迎えられ、その後殆ど毎日のようにどこかで研鑽会があった。その度に出かけて行くようになったが、不思議なことにもいつも発言が山岸と一句同音になるのである。ニワが発言しようとする、その傍から山岸が同じことをいう。何かテーマがあると、同じように出る。まだ意識的な愛情の域にはなかったが、よくもこんなに話が合うものかと思った。それでいて、山岸と会えば恥ずかしくて口をきかないし、会わないと何かしらさびしい気がしたものである。

一冬越して、翌年三月三日のことであるが、岡本善衛の方から会に輸出入の卵粉工場をやらなにかという話が持ち込まれた。山岸会は鶏の会だから、卵を卵粉にしてアメリカに輸出すれば大いに儲かるというのである。この卵粉工場の話の機にニワは、それならば養鶏場を集めて、そこでユートピアのモデル社会をつくらうではないかという提案をした。

かくて全国でも一番活発な四日市の山岸会を地盤として、トントン拍子に、これまでにまったく新しい新型の理想社会建設の案が育まれていったのである。

集団養鶏の提案がなされるや、すぐに目標羽数が問題となったが、これに対してニワは、「十萬羽や二十萬羽ならいやや、百萬羽養鶏にしよう」といい出した。岡本は目を丸くして、「あなたは素人で何も知らんから」といった。何しろその頃は、數萬羽養鶏もなかった頃である。すると山岸が間髪を入れず、「いや、それはなりません」と答えた。そしてそう明言した時の、山岸の嬉しそうな顔といったらなかった。